

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	大学の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン リョウジョウガクイン 学校法人 柳城学院									
フリガナ大学の名称	ナゴヤリュウジョウジョシダイガク 名古屋柳城女子大学 (Nagoya Ryujo Women's University)									
大学本部の位置	愛知県名古屋市昭和区明月町2丁目54番地									
大学の目的	キリスト教精神に基づいた「人びとと共に生き、人々に仕える」という建学の精神を理解し、豊かな人格を有して、現代社会に貢献することのできる女性の養成を目的とする。									
新設学部等の目的	幅広い教養を身につけ、理論と実践との間の往還的な学びを通して、子どものいのちの大切さを感じ、子どもや保護者の多様な思いを共感的に理解することができ、子どもの表現を引き出しながら、自らの保育を創造していくことのできる、より高度な実践力を身につけた保育者の育成を目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	こども学部 Faculty of Child Studies	年	人	年次人	人	学士 (こども学) Bachelor of Child Studies	年 月 第 年次	愛知県名古屋市昭和区 明月町2丁目54番地		
	こども学科 Department of Child Studies	4	70	-	280		令和2年4月 第1年次			
	計	4	70	-	280					
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	<当該届出以外の申請等について> 名古屋柳城短期大学 保育科 (定員減) (△70) (令和2年4月)									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	こども学部 こども学科	講義 43 科目	演習 48 科目	実験・実習 7 科目	計 98 科目	124 単位				
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
	新設分	こども学部	こども学科	8人 (6)	7人 (4)	2人 (-)	0人 (-)	17人 (10)	1人 (1)	22人 (11)
		計		8 (6)	7 (4)	2 (-)	0 (-)	17 (10)	1 (1)	-
	既設分	該当なし		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
		計		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	合計			8 (6)	7 (4)	2 (-)	0 (-)	17 (10)	1 (1)	-
教員以外の職員の概要	職種			専任		兼任		計		
	事務職員			20人 (20)		3人 (3)		23人 (23)		
	技術職員			0 (0)		0 (0)		0 (0)		
	図書館専門職員			1 (1)		4 (4)		5 (5)		
	その他の職員			0 (0)		1 (1)		1 (1)		
計			21 (21)		8 (8)		29 (29)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	名古屋柳城短期大学 (必要面積 2,600㎡) と共用			
	校舎敷地	0㎡	5,720.15㎡	0㎡	5,720.15㎡				
	運動場用地	0㎡	0㎡	0㎡	0㎡				
	小 計	0㎡	5,720.15㎡	0㎡	5,720.15㎡				
	そ の 他	0㎡	18,290.00㎡	0㎡	18,290.00㎡				
合 計	0㎡	24,010.15㎡	0㎡	24,010.15㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	名古屋柳城短期大学 (必要面積 2,850㎡) と共用			
		1,387.58 ㎡ (1001.38 ㎡)	5,475.32 ㎡ (5,281.84 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	6,862.90 ㎡ (6,283.22 ㎡)				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体			
	15室	26室	1室	1室 (補助職員 0人)	0室 (補助職員 0人)				
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称 こども学部こども学科		室 数	19 室	内共同研究室1を含む			
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	名古屋柳城短期大学 と共用	
	こども学部こども学科	63,134 [1,865] (62,248 [1,599])	100 [7] (100 [7])	6 [6] (6 [6])	1,470 (1,404)	2,539 (1,225)	0 (0)		
	計	63,134 [1,865] (62,248 [1,599])	100 [7] (100 [7])	6 [6] (6 [6])	1,470 (1,404)	2,539 (1,225)	0 (0)		
図 書 館		面積	閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数	名古屋柳城短期大学 と共用				
		617.43㎡	117	71,370					
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						図書館面積に ラーニングコモンズ 160.14㎡を含む
		626.57㎡	該当施設なし						
経 費 積 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書購入費に 電子ジャーナル・ データベースの整備・ 運用費用を含む。
		教員1人当り研究費等	300千円	300千円	300千円	300千円	-	-	
	共同研究費等	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	-	-		
	図書購入費	5,468千円	4,928千円	2,624千円	1,500千円	1,500千円	-	-	
	設備購入費	4,764千円	96,711千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	-	-	
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
		1,370千円	1,125千円	1,125千円	1,125千円	- 千円	- 千円		
学生納付金以外の維持方法の概要		私立大学経常費補助金、資産運用収入、雑収入等							
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	名古屋柳城短期大学							
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地
	保育科	2	200	年次 人	400	短期大学士 (保育学)	0.85	昭和29年	名古屋市昭和区 明月町2丁目54番地
	専攻科保育専攻	2	15		30	学士(教育学)	0.59	平成9年	同上
専攻科介護福祉専攻	1	30		30		0.33	平成10年度	同上	
附 属 施 設 の 概 要		名古屋柳城短期大学附属柳城幼稚園 幼保連携型認定こども園名古屋柳城短期大学附属豊田幼稚園 名古屋柳城短期大学附属三好丘聖マARGERITT幼稚園							

教育課程等の概要														
(こども学部こども学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
基幹科目	キリスト教概論	1前	2			○			1					
	キリスト教人間学	1後	2			○			1					
	倫理と人間	1前	2			○			1					
	多文化共生	2前	2			○								
	小計(4科目)	—	8	0	0	—	—	—	2	0	0	0	0	—
教養科目	心理と人間	2後		2		○				1				兼1
	福祉と人間	1後		2		○								兼1
	生命と人間	1後		2		○								兼1
	数学と生活	3後		2		○								兼1
	異文化理解	2後		2		○								兼1
	子どもと哲学	4前		2		○			1					
	子どもと文化	4前		2		○								兼1
	美術と文化	3後		2		○				1				
	音楽と文化	4後		2		○				1				
	言葉と文化	4後		2		○								兼1
	日本国憲法Ⅰ	2前		2		○								兼1
	日本国憲法Ⅱ	3後		2		○								兼1
	スポーツと健康	1前		1		○			1					
	スポーツとレクリエーション実技Ⅰ	1後		1				○	1					
スポーツとレクリエーション実技Ⅱ	2前		1				○	1						
	小計(15科目)	—	0	27	0	—	—	—	2	3	0	0	0	兼5
外国語科目	英語基礎Ⅰ	1前		1				○						兼1
	英語基礎Ⅱ	1後		1				○						兼1
	英語実践Ⅰ	3前		1				○						兼1
	英語実践Ⅱ	3後		1				○						兼1
	ポルトガル語基礎Ⅰ	3前		1				○						兼1
	ポルトガル語基礎Ⅱ	3後		1				○						兼1
	韓国語基礎Ⅰ	3前		1				○						兼1
	韓国語基礎Ⅱ	3後		1				○						兼1
	中国語基礎Ⅰ	3前		1				○						兼1
	中国語基礎Ⅱ	3後		1				○						兼1
	小計(10科目)	—	0	10	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼4
研究・支援科目	情報基礎Ⅰ	1前		2		○								兼1
	情報基礎Ⅱ	1後		2		○								兼1
	調査・統計法Ⅰ	1前	2			○				1				
	調査・統計法Ⅱ	2前		2		○				1				
	論文作成とプレゼンテーション	3前		2		○			1					
	論文作成法	3後		2		○			1					
	小計(6科目)	—	4	8	0	—	—	—	1	1	0	0	0	兼1
専門基幹科目	現代子ども学	1前	2			○			1					
	社会と子どもの教育	3後	2			○			4	1				オムニバス
	教育原理	2前	2			○			1					
	保育原理	1後	2			○			1					
	発達心理学	1前	2			○				1				
	教育心理学	1後	2				○			1				
		小計(6科目)	—	12	0	0	—	—	—	5	2	0	0	0

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門 演習・ 研究 科目	子ども学フィールドワークⅠ	1通	4				○		2	3			1		共同
	子ども学フィールドワークⅡ	2通	4				○		1	2	1		1		共同
	子ども学フィールドワークⅢ	3通	4				○		3		1		1		共同
	子ども学研究ゼミナール	4通	4				○		7	7	2				共同
	卒業研究	4通	4				○		7	7	2				共同
	保育・教職実践演習(幼)	4後	2				○		3	1					オムニバス
小計(6科目)		—	22	0	0	—			7	7	2	0	1	0	—
合計(98科目)		—	64	106	0	—			8	7	2	0	1	兼22	—
学位又は称号		学士(こども学)			学位又は学科の分野			教育学・保育学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
教養教育課程から、必修12単位、選択必修22単位(教養科目18単位、外国語科目4単位)を含めて、38単位以上取得すること。 専門教育課程から、必修52単位(専門基幹科目12単位、専門発展科目15単位、専門実習科目3単位、専門演習・研究科目22単位)、選択必修6単位(「幼児と健康」「幼児と人間関係」「幼児と言葉」「幼児と環境」「幼児と表現」より3単位以上、「保育内容指導演法 総論」「保育内容指導演法 健康」「保育内容指導演法 人間関係」「保育内容指導演法 言葉」「保育内容指導演法 環境」「保育内容指導演法 表現」より3単位以上)を含めて、86単位以上取得すること。 卒業に必要な最低単位数は124単位 年間履修科目の登録の上限単位数48単位(前期24単位 後期24単位)							1学年の学期区分		2期						
							1学期の授業期間		15週						
							1時限の授業時間		90分						

授 業 科 目 の 概 要			
(こども学部こども学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 科 目	キリスト教概論	授業では、キリスト教とはどのような宗教であり教えるのであるかを、キリスト教にはじめて触れる人を念頭に置きながら、その基礎的なことから学んでいく。キリスト教概論では、その中心の存在であるイエスがどのような生き方をし、どのような教えを語ったのかを新約聖書を中心に学ぶとともに、その背景にある旧約聖書についても学ぶ。本学の建学の精神であるキリスト教そのものについて理解を深め、キリスト教について学ぶことが保育者を目指す上でも重要なことを認識してもらおうとともに、聖書の教えが自らの生き方を考える上でも参考になることを提示する。	
	キリスト教人間学	授業では、キリスト教では人間をどのように捉えているかということについて検討していく。子どもという存在についてはもちろんのこと、人間存在そのものについて、また、弱さ、病、苦しみ、老い、死、共生、信仰、希望、愛などをキーワードとしつつ、聖書の教えをおりまぜながら考察していく。本学の建学の精神であるキリスト教そのものについて理解を深め、キリスト教について学ぶことが、保育者を目指す上でも重要なことを認識してもらおうとともに、聖書の教えが、自らの生き方を考える上でも参考になることを提示する。	
	倫理と人間	「人間とは何か」という基本的な問いと向きあい、保育・教育・福祉の現場における倫理的判断の基礎となる倫理・哲学的な考え方を身につける。倫理学と哲学の歴史を古代ギリシアから現代思想まで概観しながら、善と悪、生と死、自己と他者、人間の強さと弱さなどの対概念で表されるようなテーマを軸にして、人間とは何かを掘り下げる。これらのテーマに取り組むことを通して、保育・教育・福祉の専門職を目指す学生の指針の一つとなるであろう「ケアの倫理」の理解を深め、柔軟だが芯の通ったものの見方・考え方を身につけることをめざす。 こども学科の学生にとって親しみのある児童文化財である絵本を取り上げ、毎回のテーマに沿った絵本を読み聞かせて思案を進める足がかりとする。	
	多文化共生	在留外国人が多い地域では、多文化共生の社会づくりが求められるようになった。まず、外国人増加の背景や実態を把握し、国や自治体、学校の様々な取り組みを学ぶ。特に愛知県の「あいち多文化共生推進プラン」の先進的な取り組みを知り、課題を探る。 以下の3点を到達目標とする。 ①様々な取り組みや具体的な事例を通して、無知からの偏見をなくす。 ②文化背景の異なる地域住民と共生する生活者として、自分ができていることを考える。 ③日本で生活する外国につながる子どもを育てる保育者として、何をすべきかを考える。	
	心理と人間	保育者として幼児期の援助を行うためには、幼児の心情や行動についての理解が不可欠である。この講義では、心や行動の科学としての心理学の幅広いトピックを概観し、幼児ひいては人間の心や行動の理解を深めていくことを目的とする。具体的には、心理学が心をどのように捉え扱ってきたかという歴史的な背景、研究方法や多様な領域(感覚・知覚、記憶、学習、思考と言語、動機づけ、発達、性格、社会行動など)について学び、心とは何か、人間とは何かを考える機会とする。	
	福祉と人間	現代社会は貧困や虐待、ひきこもりをはじめとして様々な社会問題を引き起こしている。その問題を解決するための制度や施策も追いついていない現状がある。この科目では、社会福祉の歴史を学び、日本の社会福祉の発展のためにどのような過程を経してきたかを学ぶ。また時代ごとの背景や権利思想の代表者を取り上げて、その時代の社会福祉の課題について検討する。歴史や権利思想を学ぶことで、現在の福祉と共通する人間の人格や発達もみえてくる。今日の社会福祉のありかたを探り、保育者として福祉とは何かを自分の言葉で表現できることを目指す。	

教養科目	生命と人間	日常生活から切り離されている「生」と「死」について学ぶことで生きることの意味や命の重さを考える。「生」については女性のからだのしくみから妊娠出産の変化までを胎児と母親の両視点から理解する。その上で、まず、命の誕生にまつわる問題である出生前診断と人工妊娠中絶、生殖補助医療技術と代理母などを討論することでより学びを深めていく。次に命の終焉である「死」について、死にゆく人の心身の変化を理解し、安楽死、尊厳死など死をめぐる問題に視点をあて、命について考える。	
	数学と生活	教員の一方通行的な講義だけではなく、学生自身の主体的な学びを誘う方法として、ペアワークやグループディスカッションを積極的に取り入れアクティブラーニング型授業を実践する。また算数、数学の基礎学力を身に付けると共に、算数・数学の面白さ、日常生活に於いてどのような場面で活用されているかを、できる限り初等数学の範囲で例を示したい。さらには、将来、教員、親になったときに、適切な算数指導が出来るようなスキルを身に付けることを目指す。前半回での算数、数学の基本的な知識の復習と演習、後半の回でその知識を活用する場を提示し、算数、数学の活用能力を身に付ける、そして最終的には良き指導者として、算数・数学の面白さを子ども達に伝えることの出来る力を育成する。	
	異文化理解	『異文化』は、単に外国の文化ではなく、年齢・性差・出身地・障がいの有無などであることを知り学び、それらをめぐり日本国内および世界で起きている事象とその背景について考える。これらを通して、自分のなかで無意識のうちに引いている「境界線」の存在に気づき、「我」と「彼」とを隔てている事柄に目を向けることを目指し、保育者として、幼児の『異文化』への対応がどのように生じるのかについてその基礎を学ぶ。授業形態は講義だが、教員と学生・学生と学生との意見交換による協働的授業とする。	
	子どもと哲学	この授業では、哲学史上のさまざまな見解や思想を紹介するとともに、絵本や児童文学を題材にして、子どもをめぐる哲学的思考を3つの観点から掘り下げる。 1)「小さな哲学者」と言われる子どもの感性を想起し、子どもの視点に立って、新鮮な驚きをもってさまざまな問いを立てる。 2)古今の哲学者の思想や洞察を、遊ぶこと、成長すること、疑問を抱くことなどの子どもの興味関心や課題と関連づけて学ぶ。 3)「子どもとは何か」、「遊びとは何か」、「人間はなぜ遊ぶのか」、などの問いを掘り下げ、子どもをケアする意味を考察する。これらの問いに取り組んだ哲学者の言葉を学びながら、受講生自身の子ども観、教育観を確立させる。	
	子どもと文化	言葉を育て、想像・創造する楽しさを広げる方法について知り学ぶ。児童文学・絵本などを素材として、それらがいかなる理由で、どのような展開・伝達の方法をとっているのかを体験することで、幼児の発達段階と言語を生み出す能力や、頭の中で起きていることを理解することを目指す。また、「遊び」の意義についても理解する。授業形態は講義だが、レアリアを用いることから学生による発表も行う。	
	美術と文化	この授業では、美術史を学びながら美術の基礎的な理解や視野を広げるとともに、美術を通じた文化創造への理解を深め、美術と地域文化について関心を高めることをねらいとする。また、美術作品のよさや美しさなどを味わう鑑賞能力を育てるために視聴覚資料を用いたグループワークおよび鑑賞学習を行う。その学習成果を明確にするために美術館および博物館などの展覧会に参加し、美術作品の鑑賞方法を身につける。なお、美術的観点から児童文化財を取り上げ、幼少期の美術教育の重要性について学ぶ。	
	音楽と文化	音楽は人間の生活と密接に関わりがあり、人が生み出した文化の一つである。ゆえに他文化とも関係性があり、相互的な影響力を持つ。そこで音楽という手段を通して表現されてきたものを知ることによって、文化や歴史を理解する。そのために音楽史やさまざまなジャンルの音楽について、鑑賞や実際に演奏することを通して理解する。また我が国の子どもの歌の歴史を概観し、その文化的背景を学ぶ。そして音楽を愛好する心情を育成し、豊かな感性と幅広い教養を身につけることを目標とする。	
	言葉と文化	「文化」という抽象概念がいかに「言葉」に影響を与えるかということについて、保育者が自身の言語生活をふりかえり、体得する。そのうえで、幼児をとりまく「文化」が言葉の習得や発達に影響するかということを観察・分析する力を身につけ、それらをふまえたうえで、指導・教育にいかんにか生かすかということ学ぶ。自文化の認識、他文化の認識、多文化の受容という過程を通して、外国にルーツをもつ幼児および保護者への理解を有する保育者となる基礎段階に到達することを目標とする。授業形態は講義だが、教員と学生・学生と学生との意見交換による協働的授業とする。	

日本国憲法 I	<p>①保育者を目指す者として日本国憲法を学ぶことの重要性を理解する。</p> <p>②21世紀の日本を作っていく子ども達に保育や教育という仕事と全ての人々が個人として尊重され幸せに生きていける国を目指す)を理解する。</p> <p>③社会人として必要な人権感覚と政治に関する一般的教養を身につける。</p> <p>上記のことを目標としながら授業を行う。</p>	
日本国憲法 II	<p>日本国憲法 I で基礎的な憲法学を学んだ者に対して、保育・幼児教育をしていくうえで必要な人権感覚が具体的にどのような場面で問われるのか、また実際の政治や法律施行の場面で憲法がどのように機能するのかを具体的な憲法判例を教材にして憲法解釈に踏み込んだ学習を行う。模擬試験形式を取り入れながら、議会制民主主義・地方自治等の知識を修得するための学習を行う。授業は講義の形態で行うが、演習を通じて理解を深める機会を作る。</p>	
スポーツと健康	<p>健康とは身体的、精神的、社会的、心理的に良好であることと捉えられるが、そのための考え方や工夫の仕方を身に付けることをねらいとする。また、体力が精神力や社会的活動力とも関連している点について理解するために、障がいの有無に関わらず、子どもから高齢者までの健康生活を考えるテキストを活用しつつ、多様な映像教材を取り入れる。特に、子どもの遊びや生涯にわたるスポーツ・レクリエーション活動が、非認知能力としてのコミュニケーション能力や人間関係構築力、さらには人としての生きがいや生き方にまで良い影響や効果をもたらすことを知る内容とする。</p>	
スポーツとレクリエーション実技 I	<p>高校までの体育系科目で修得した体育実技の各要素(体力、運動能力、各種スポーツ技能、コミュニケーション能力)を土台とし、自分の学生生活や卒業後の社会生活および職業生活に生かすことのできる知識・技能を修得することをねらいとする。よって、自他の体力維持や健康管理につながるだけでなく、子どもから高齢者、障がい者のスポーツ・レクリエーション活動に関する考え方や技能を体験し、身に付けることを目的とする。それらのために現在行われている障がい者スポーツやスポーツ・レクリエーションの種目を取り入れる。</p>	
スポーツとレクリエーション実技 II	<p>高校までの体育系科目と「スポーツとレクリエーション実技 I」で修得した各要素(体力、運動能力、各種スポーツ技能、コミュニケーション能力)を土台とし、自分の学生生活や卒業後の社会生活および職業生活に活かすことのできる知識・技能を修得することができる。自他の体力維持や健康管理につながる工夫やアレンジを体験し、スポーツ・レクリエーション活動実施の活性化につなげるための考え方や技能を身に付ける。非日常のレジャー・スポーツを体験し、異世代間の交流やスポーツ・レクリエーション活動に活かせる知識を得ることができる。</p>	
英語基礎 I	<p>日本の保育園や幼稚園において、さまざまな文化背景を持った外国人の保護者や園児と接する機会が増えていることや、園児たちにも外国語活動を導入しているところが増えている現状を踏まえて、異文化間コミュニケーションの基礎を学ぶ。中学や高校で学んだ語彙や文法をベースに、保育と英語という2つの領域を統合させたテキストで、英会話と文化的な背景や知識を学びながら、保育の現場に必要な英単語とフレーズを身につける。英語をコミュニケーションの道具として認識し、「英語を使って伝えること」を目標として、保育現場でのさまざまなシチュエーション別に学習する。</p> <p>英語基礎Iでは、「保育所で働く人たち」「保育所の園舎」「園児の持ち物」「園庭の遊具」など、園児たちの身の回りの基礎的な内容について学ぶ。</p>	
英語基礎 II	<p>日本の保育園や幼稚園において、さまざまな文化背景を持った外国人の保護者や園児と接する機会が増えていることや、園児たちにも外国語活動を導入しているところが増えている現状を踏まえて、異文化間コミュニケーションの基礎を学ぶ。中学や高校で学んだ語彙や文法をベースに、保育と英語という2つの領域を統合させたテキストで、英会話と文化的な背景や知識を学びながら、保育の現場に必要な英単語とフレーズを身につける。英語をコミュニケーションの道具として認識し、「英語を使って伝えること」を目標として、保育現場でのさまざまなシチュエーション別に学習する。</p> <p>英語基礎IIでは、「ランチタイム」「トイレ・トレーニング」「けがと病気」「遠足」など、園児たちの活動に関わる基礎的な内容について学ぶ。</p>	
英語実践 I	<p>英語基礎I & IIの基礎的な学習をベースに、保育現場で役に立つ、実践的な英語を学ぶ。園児たちの年齢に応じて、英語の手遊びや歌やダンスをしたり、折り紙やお絵かきや工作をしたり、英語の絵本を読み聞かせるなど、さまざまな英語での活動にチャレンジする。また、保護者たちと英語でコミュニケーションを取れるように、行事のお知らせや、連絡帳の書き方、送迎時の会話なども学びます。就職に備えて、公務員試験や保育英語検定などの試験のための演習問題にも取り組む。</p>	

外国語科目	英語実践Ⅱ	英語実践Ⅰで学んだことをベースに、保育現場で即戦力となる実践的な英語を学ぶ。保育園／幼稚園の行事や、季節に合わせた遊びの場で、指導者として実際に園児たちに教えることができるように、実践形式で学ぶ。クラスメイトを園児たちに見立てて、英語実習のレッスンプランを発表したり、それぞれの英語教材(手遊び、歌、ダンス、絵本など)を使いながら、園児たちの年齢によって指導法を変えたりなど、指導者目線に必要なことを身につける。	
	ポルトガル語基礎Ⅰ	2017年現在、5万3千人のブラジル人が愛知県に在住し、保育園や幼稚園に在園しているブラジル国籍の子どもも見られる。この授業では、ブラジルのポルトガル語を初めて学習する人を対象に、保育園や幼稚園でも役に立つポルトガル語を初歩から学習していく。教科書に基づき、発音・あいさつ・名詞・ser動詞・形容詞・所有詞・規則動詞・命令形を学習する。加えて、ブラジルや在日ブラジル人についても学ぶ。 授業計画は、次の通りである。 1)オリエンテーション、2)文字と発音①とあいさつ、3)文字と発音②とアクセント、4)文字と発音③と筆記体、5)名詞の性と数、6)ser動詞①、7)ser動詞②と形容詞、8)所有詞、9)2～8の復習と表現練習、10)規則動詞の活用①、11)規則動詞の活用②、12)前置詞と指示詞、13)命令形、14)数詞と日付、15)10～14の復習と表現練習	
	ポルトガル語基礎Ⅱ	この授業は、ポルトガル語基礎Ⅰに引き続き、ブラジルのポルトガル語の初級者を対象に、保育園や幼稚園でも役に立つポルトガル語の学習を目指す。教科書やプリントを使いながら、直説法現在・完全過去・不完全過去、未来、命令法を学ぶ。ポルトガル語での紙芝居の読み聞かせ、筆記体の読み書き、誉め言葉についても学習する。 授業計画は、次の通りである。 1)これまでに学習した内容の確認、2)estar動詞①とser動詞、3)estar動詞②と現在進行形、4)不規則動詞querer、5)時間の表現、6)不規則動詞ter、7)不規則動詞poder、8)saberとconseguir動詞、9)1～8の復習と表現練習、10)完全過去形、11)不完全過去形、12)不規則動詞irとvirと未来形、13)命令法、14)時を表す副詞、15)10～14の復習と表現練習	
	韓国語基礎Ⅰ	積極的な学生参加型の授業を演習形式で行う。ペアワークを通じた会話練習を入念に行う。 (目標) 300語程度の活用語彙、20項目程度の文法事項を身につける。同時に、ハングル能力検定試験の5級に合格することを目標とする。 (授業計画) ハングルの修得し、旅行に便利な表現を身につける。 実際の場面で役立つ実践的な会話能力を身につけ、テキストの読解を通して語彙力、表現力を高めていく。 ① ハングルの修得。 ② 韓国語で自己紹介ができる。 ③ 旅行の際に使える実践的な簡単な会話ができる。	
	韓国語基礎Ⅱ	積極的な学生参加型の授業を演習形式で行う。ペアワークを通じた会話練習を入念に行う。 (目標) 300語程度の活用語彙、20項目程度の文法事項を身につける。同時に、ハングル能力検定試験の4級に合格することを目標とする。 (授業計画) 韓国語基礎Ⅰで学習した文法・語彙・句型などの基礎的な能力を活用し、韓国語を理解する力(聴解、読解)と運用する力(会話、作文)を総合的に向上させる。	
	中国語基礎Ⅰ	この授業は、中国語の面白さからスタートし、中国語に興味を持たせる内容とする。そして中国語のピンイン、声調と変調および中国語の簡体字の正確な書き方、言語の表現など基礎的な知識や文法などを習い、更に挨拶、会話と一言作文などの練習を通して、中国語の基本的な表現を正しく、しっかりと身につけることを到達目標とする。	
	中国語基礎Ⅱ	この授業は、「中国語基礎Ⅰ」で学んだことをベースにして、主に中国語の文の作り方や文法などを更に学んでいく内容とする。クラスの全員が色々な文(一言作文の他に文章の作文などを取り扱う)を作ったり、読んだり、そして互いに聞いたり、訳したり、会話したりするように練習して、できるだけ早く中国語を正しく使うことが出来るように目指していく。	

I C T ・ □ 研 究 支 援 科 目	情報基礎 I	この授業では、学生、社会人の資質能力として必要とされる、情報リテラシー(情報機器の活用、情報の収集・分析、適切な判断能力)を修得する。まず、パソコンおよび文書処理の機能を修得する。次に、インターネットを活用し、検索と収集によって得られた情報を整理、活用するための技法や注意点について講義を行う。関連して、「情報と社会」というテーマで、情報社会で適切に行動するために必要な知識を学習する。 到達目標を次のように設定する。1)文書処理の技法を理解する、2)インターネット上の情報の、検索、収集および整理、活用するための、技法や注意点を修得する、3)情報倫理(個人情報保護、知的財産権など)について理解を深める。	
	情報基礎 II	この授業では、「情報基礎 I」で修得した知識、能力をベースとして、より高度な情報リテラシー(総合的情報処理能力)を修得する。まず、表計算とプレゼンテーションに関する機能を修得する。次に、インターネット上で発信されている情報の整理や分析、考察を行い、それらのプレゼンテーションを行ったり、文書やネット上へ発信することを想定して、技法や注意点について講義を行う。関連して、「情報と社会」というテーマで、情報社会でより積極的かつ能動的に行動するために必要な知識を学習する。 到達目標を次のように設定する。1)表計算、プレゼンテーションに関する技法を理解する、2)インターネット上の情報に関する特性の理解と、情報処理、表現技法や注意点を修得する、3)情報倫理(ネット犯罪、健全な情報発信など)について理解を深める。	
	調査・統計法 I	この授業では、文献や資料のデータを読み解く際、および4年次の「卒業研究」において調査研究を行う際に必要となる統計的処理の基礎を学ぶ。また、調査研究で頻りに利用される質問紙による調査の基礎的な方法を学ぶ。具体的には記述・推測統計の考え方について理解を深め、統計的検定の手法を学ぶ。それを踏まえ、受講生の身近な疑問についてテーマを設定し、既存の質問紙を用いて調査を実施し、集計、解析までの一連の流れを体験する。同時に調査結果を他者にわかりやすく伝えるためのプレゼンテーション手法についても体得する。	
	調査・統計法 II	「調査・統計法 I」を踏まえ、4年次の「卒業研究」を含めた研究をより発展させるための統計的方法、調査方法について理解を深める。具体的には質問紙法、観察法、実験法等の多様な調査方法の種類を実際に体験しながら学ぶ。また、その分析の際の統計的手法と適切な検定方法の選択について学びを深める。特にアンケート調査に必要な質問紙による心理尺度の構成および調査項目の作成とそれに基づいた因子分析・主成分分析といった多変量解析を中心とした統計手法について学ぶ。	
	論文作成とプレゼンテーション	この授業では、論文・レポート作成のための基本的なスキルと知識を修得し、研究発表に向けた実践的なスキルを身につける。研究テーマの候補を検討することからはじめて、文献調査を進め、各自の第一候補の研究テーマについての発表とレポート作成を行う。その過程で、研究テーマに即した調査・研究の方法論を学び、口頭発表とポスター発表の準備と実践に取り組む。 具体的には、1)研究テーマの検討とテーマ候補の調査、2)文献の調査と読解、3)文献レビューの作成、4)研究方法の種類と特徴、5)先行研究の読解と考察を中心とした研究テーマのプレゼンテーション(口頭発表とポスター発表)、6)研究テーマ発表をもとにした研究レポートの作成を行う。	
	論文作成法	「論文作成とプレゼンテーション」での学びをふまえて、論文作成のための準備と実践的な知識・技術の修得を進める。 具体的には、各自の研究テーマを第一候補から第二、第三候補程度まで挙げて、テーマごとに、1)先行研究の収集と読解、2)研究と調査の方法、3)研究計画の検討、4)予備調査(必要な場合に実施)、5)第一候補の研究テーマの発表会、6)発表に基づいて研究論文の形式で期末レポートを作成する。また、その過程で、7)章・節の構成の仕方、8)引用と注の方法、9)研究倫理と論文執筆の心がまえを学習する。	

	現代子ども学	<p>子どもと大人の関係という関係論的視点から、子どもとは何者か、子ども期とはいつからいつまでなのかという問いを出発点とし、幼児教育・保育における子ども理解の基礎を学ぶことを目的とする。E・H・エリクソンのライフサイクル論から、高齢化と少子化を基本的な特徴とする日本の現代社会において、祖父母と孫という世代関係を視野に入れた、子どもと大人の世代間のかかわりについて検討する。そして、子どもの内面理解を通して、子どもと大人の相互発達をテーマにした津守真等の文献を中心に、子どもの見方、論じ方を学び、世代間の相互形成という視点から子ども学を探究する。</p> <p>学修の到達目標は、以下の5点となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①E・H・エリクソンのライフサイクル論を理解する。 ②少子高齢化社会における、子どもと大人のかかわりの課題について考える力をつける。 ③専門職としての保育者のかかわりを、ライフサイクルに位置づけて理解する。 ④津守真の子どもの内面理解の方法を理解する。 ⑤現代社会における、子ども理解と課題について考える力をつける。 	
専門基幹科目	社会と子どもの教育	<p>(概要) 本科目は、子ども学部の特徴ある科目として位置づき、現代社会における子どもの問題に目を向け、教育の在り方を考えることを主眼とする。子どもの成長および子どもを取り巻く教育的環境の問題を、「子どもと教育」「子どもと文化・メディア・倫理」「子どもと遊び」「子どもと発達支援」「子どもと生活・健康」という大きく5つの視点から取り上げ、それぞれ具体的な課題を考察する。</p> <p>各テーマごとに、子どもが置かれている現状を理解し、具体的なデータ・資料等に基づく問題整理の仕方を学び、これからの社会に生きる子どもたちの教育はどうあるべきかを問題解決志向的に考える。総合的に、現代社会における子どもの教育の問題に深く広く関心をもつ。</p> <p>学修の到達目標は以下の通りである。乳幼児期から学童期までの子どもの育ちと社会的環境について、さまざまな視点から興味をもって理解し、教育を受ける子どもの側にとって問題を整理し、解決していこうとする学びの力、つまり「子ども学」へのアプローチを学ぶ。具体的な到達目標としては、①資料やデータから子どもの現状を理解していく学び方を習得する。②子どもを中心とした教育の在り方という視点から、具体的な課題について関心を深める。③子どもを取り巻く諸問題について、教育はどうあるべきかという問題解決的な考え方を学ぶ。そのことによって、現代社会における教育と子ども理解という子ども学的センスを身に着ける。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(2 荻原はるみ／3回)</p> <p>「子どもと発達支援」をテーマに、子どもが置かれている現状を理解し、具体的なデータ・資料等に基づく問題整理の仕方、問題解決的な考え方を学ぶ。</p> <p>(4 豊田和子／3回)</p> <p>「子どもと教育」をテーマに、子どもが置かれている現状を理解し、具体的なデータ・資料等に基づく問題整理の仕方、問題解決的な考え方を学ぶ。</p> <p>(6 村田康常／3回)</p> <p>「子どもと文化・メディア・倫理」をテーマに、子どもが置かれている現状を理解し、具体的なデータ・資料等に基づく問題整理の仕方、問題解決的な考え方を学ぶ。</p> <p>(7 鈴木裕子／3回)</p> <p>「子どもと生活・健康」をテーマに、子どもが置かれている現状を理解し、具体的なデータ・資料等に基づく問題整理の仕方、問題解決的な考え方を学ぶ。</p> <p>(13 藤塚岳子／3回)</p> <p>「子どもと遊び」をテーマに、子どもが置かれている現状を理解し、具体的なデータ・資料等に基づく問題整理の仕方、問題解決的な考え方を学ぶ。</p>	オムニバス方式
	教育原理	<p>教育、学校とは何かを改めて問い直し、その答えを探究していくことを目的とする。前半では学校、幼稚園、保育所、認定こども園の歴史と現状から、教育の意義や教育制度について検討する。後半ではさまざまな教育思想に基づき、子ども観、教育観の変遷をグループ発表により学修する。そして、今求められている乳幼児期の教育と保育者の資質について考察する。</p> <p>学修の到達目標は、以下の4点となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 日本の近代学校教育制度について歴史を通して理解する。 ② 日本の幼児教育制度について歴史を通して理解する。 ③ 日本と諸外国の教育思想について理解する。 ④ 幼児教育の原理を大人と子どものかかわりから理解する。 	

保育原理	本授業の目標は、保育所・幼稚園・認定こども園の保育の原理を正しく理解することで、具体的な到達目標と計画は、①保育の意義の理解、②保育制度の理解、③保育の基本原則と方法の理解、④保育の計画の意義の理解、⑤保育の思想と歴史の変遷(諸外国と日本)の理解、⑥保護者の子育て支援の理解、⑦保育の現状と課題についての考察、である。現代社会における保育の役割や課題を踏まえながら、保育者として理解・認識しておくべき保育の原理、とりわけ、保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に記載されている保育の原理と基本について学修する。	
発達心理学	本授業の目標は、乳幼児期から青年期にかけての発達について学び、各発達段階における特性を理解することである。授業では、ピアジェやエリクソンといった主要な発達理論を理解し、乳幼児を観察し育てる際の視点を養う。次に、言語、認知、運動発達について学び、各発達段階の特徴を理解する。授業を通じて、乳幼児を理解しふさわしい環境設定や援助のあり方を考える力を育てる。 講義の形態で授業を行うが、グループ討議などを通じて理解を深める機会を作る。	
教育心理学	本授業の目標は、乳幼児期の学びの特性を理解し、発達を踏まえた学習環境のあり方について理解することである。発達過程、学習理論、動機づけ、集団づくり、学習過程の評価について学び、効果的な指導の基礎を理解する。同時に、幼児期を特徴づける主体的な学びである遊びの重要性について取り上げ、遊びを通じた学びを豊かにする環境設定について理解する。またグループ討議と発表を通じて理解を深める。	
保育者論	本授業の目標は、職業としての保育者(幼稚園教諭・保育士・保育教諭等)の意義、役割・資質能力・職務内容等を身につけ、教職への意欲を高め、さらに適性を判断し、自分の進路選択に役立てることである。授業計画は、以下のとおり。①これからの社会における保育者の役割の理解。②保育者の制度的な位置づけの理解。③保育者の資質と専門性についての理解。④保育者に求められる倫理観・人間性の理解。⑤保育者に求められる協働性の理解。⑥保育者の資質向上。授業では、主体的な学びのため、事例学習やグループ討議、模擬保育などの方法を取り入れる。	
社会福祉	本講義では、保育士・社会福祉専門職として携わる際に必要となる社会福祉の基本的視点および知識を身につけることを目的としている。前半では子ども家庭福祉など社会福祉の分野(「各論」)を、後半では社会福祉の歴史、法制度などの「総論」を取り上げ、現代社会における社会福祉の仕組みや意義、保育士・社会福祉専門職の役割・機能について事例にふれながら体系的に学んでいく。到達目標は以下の5つである。①社会福祉の視点・考え方を身につける、②社会福祉の基本理念を理解する、③現代社会における社会福祉制度の役割・機能を理解する、④社会福祉の法制度と提供主体について理解する ⑤社会福祉政策の動向と課題を理解する。本講を通じて、多岐にわたる生活問題を抱えた子ども・家族に対して分野横断的・包括的な支援を展開できる基礎力を養う。	
子ども家庭福祉Ⅰ	本講義では、子ども・家族とそれらを取り巻く社会的側面(地域社会、多機関・多職種、法制度など)との関係に焦点をあて、子ども家庭福祉の基本的視点および知識を身につけることを目的としている。本講では、子ども家庭福祉の理念および歴史の変遷、子ども・家族が抱える福祉ニーズ(生活問題)、法制度、実施体制、子ども家庭福祉の現状と課題について体系的に学び、子ども家庭福祉の動向をふまえながら今後のあり方を考察する。到達目標は、以下の5つである。①子ども家庭福祉の視点・考え方の理解、②子ども家庭福祉の理念の理解、③子ども・家族が抱える多種多様なニーズの理解、④子ども家庭福祉の法制度と実施体制の理解、⑤地域における社会資源(多職種・地域住民)の理解。本講を通じて、子ども・家族を取り巻く社会的側面から根拠(evidence)に基づいた総合的な実践を展開するための視点・知識を修得する。	
子ども家庭福祉Ⅱ	「子ども家庭福祉Ⅰ」で学んだことを踏まえて、現代社会における子どもの家庭福祉の意義を理解し、保育士などの福祉専門職に求められる知識と価値観を修得する。子どもの豊かな成長発達を支援していくために、家庭支援に関する諸制度・サービスを学び、幼児虐待等の事例を通じて、施策とその課題を検討する。授業は、講義形式で行うが、毎回テーマを決めてディスカッションを取り入れ、子どもに関する理解と社会的支援のあり方について学ぶ。	

乳児保育Ⅰ	<p>無防備・未熟な状態で誕生する人間の子どもは、社会・文化のなかで「人間」らしい能力を獲得しながら発達していく。子どもに直接関わる大人には、乳児期の発達の特性を理解し、時代や社会の変化に応じた環境を整えることが求められる。本講義では、「乳児保育」とは、3歳未満児への保育を示すことを念頭に、乳児保育の意義・目的と社会的役割を学ぶ。0歳から3歳未満児の発達と保育内容を理解し、さらに、保育者は幅広い役割を担っていることを理解する。</p> <p>以下の4点を到達目標とする。</p> <p>①乳児保育の歴史的な背景を知り、現代における意義や目的を理解する ②3歳未満児が過ごす多様な場の実際を知る ③3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育内容とその運営について理解する ④職員間の連携や協働、保護者との連携、地域の諸機関との連携について理解する。</p>	
乳児保育Ⅱ	<p>本科目では「乳児保育Ⅰ」で学んだ基礎的事項を軸に、3歳未満児の発達や生活、環境等の全般的な保育の内容について具体的に理解を深めることを目指す。この時期の子どもの発達は目覚ましく、また個人差も大きい。保育者には柔軟な対応が求められる。また、3歳未満児の集団での生活に配慮する具体的な方法を学び、実践力を養う。</p> <p>以下の4点を到達目標とする。</p> <p>①3歳未満児の発育・発達の過程と特性を踏まえた保育の基本的な考え方を理解する。 ②養護と教育が一体となった保育について基本的な考え方を学び、3歳未満児の生活や遊びの在り方や保育の方法等について具体的に理解する。 ③3歳未満児の保育の配慮や援助の実際について、具体的に理解する。 ④3歳未満児の保育の計画、作成について、具体的に理解する。</p>	
特別支援教育Ⅰ	<p>この講義では、幼稚園・保育所における特別支援教育・障害児保育の基本的な概念を正しく学び、特別の支援を必要とする子どもの特性及び心身の発達を理解する。様々な障害のイメージを深めるために、演習課題を提示し、自分で考え意見をまとめ発表し合うことを通じて、障害の有無にかかわらず特別な支援を必要とする子どもへの理解を深めていく。またビデオ視聴を通じて、特別の支援を必要とする子どもたちへの支援方法、および教育課程上の位置づけと内容について理解する。さらに障害の疑似体験する機会を設け、当事者の心情を知る。家庭や関係機関との連携・協働の在り方を理解し、保育現場で適切な支援ができるよう基礎知識を身に付けていく。</p>	
特別支援教育Ⅱ	<p>「特別支援教育Ⅰ」の学びを踏まえ、特別な支援を必要とする子ども一人一人の理解や支援についてさらに知識を深める。また、子どもたちの生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識及び支援方法を理解する。そのためには実際に地域の特別支援の関係機関を訪れ、そこで行われている療育や支援の現状を把握し、発表を通じて学びを深め合う。さらに、新聞記事や手記や事例を取り上げながら、グループによる検討を中心とした学び合いも展開する。これらの学びを通して、自ら問題点を探りながら、子どもを支援する際に必要な具体的方法、合理的配慮や環境調整をする力を養う。</p>	
幼児理解と教育相談	<p>幼児理解力においては、幼児の発達や学び及びその過程で生ずるつまづきやその要因を把握するための知識を身に付け、具体的方法を理解する。教育相談では、幼児の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や課題を捉え、支援するために必要な基礎的知識を身に付ける。具体的には、保育現場で出会うであろう「ちょっと気になる子」の心理と対応、保護者への助言などについて理解する。また自己洞察や幼児理解を深めるために、心理テストやグループワークを通じて、保育現場で役立つ力量と臨床的視点を身に付ける。</p>	
子ども家庭支援論	<p>①子育て家庭に対する支援の意義・目的、②保育者としての子ども家庭支援の意義や基本、③子育て家庭に対する支援体制、④子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の展開と子ども家庭支援の現状、課題、以上①～④について理解することを目標とする。具体的には、子ども家庭支援が必要とされる社会的背景、子育て家庭の状況を踏まえた上で、子育て家庭に対する社会的支援の意義や目的を理解する。とりわけ保育者として子ども家庭を支援する意義や基本的あり方、支援の対象や方法、支援における社会資源の活用や関係機関等との連携、協力のあり方等について学ぶ。</p>	

子ども家庭支援の心理学	<p>(概要) 本授業の目標は、第一に生涯発達について学び、初期経験、社会的なかかわりの重要性について学ぶことである。第二に家庭、家族の機能と現代における課題や問題を知り、社会全体で子育てを支えることの重要性を学ぶ。この授業を通じて子どもの育ちには人との関わりが重要であること、子どもの育ちを社会で支えることの重要性を知り、効果的な支援について考える力を養う。</p> <p>講義の形態で授業を行うが、グループ討議などを通じて理解を深める機会を作る。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (9 片山伸子／9回) 生涯発達、初期経験、社会性や仲間関係の発達 (20 野崎真琴／6 回) 家庭や家族の機能、子育てを取り巻く社会的機能 多様な家庭への支援</p>	オムニバス方式
子育て支援	<p>(概要) 子育て支援の理念や歴史的・文化的諸相、各種実践について学び、主体的に子育て支援を担っていくための理論と実践に関する理解を深める。また、幼稚園や認定こども園、保育園、子育て支援センター、NPO等の子育て支援活動の現状と課題を学び、子育て支援室の環境構成や子育て支援活動の計画立案の方法、保護者支援の方法など、具体的な事例を通してその考え方や技術を修得する。</p> <p>(オムニバス形式／全15回) (14 勝間田明子／8回) 子育て支援の理念や歴史的文化的変遷、子育て支援センターやNPOによる子育て支援活動の現状と課題、子育て支援室の環境構成、支援プログラムの立案と実施、海外の子育て支援の動向 (17 榎戸裕子／7回) 子育て支援の実際、幼稚園・認定こども園・保育所における子育て支援の取り組み、子育て支援センターの働き、保護者支援の理論と実際</p>	オムニバス方式
社会的養護 I	<p>現代社会における社会的養護の歴史的変遷を学ぶことで、今日の社会的養護の概要と基本原則の意義を理解する。この理解のもとにその任に当たる保育士の責務と倫理を身につける。また、主な具体的な社会的養護の制度を理解し家庭養護と社会的養護の繋がりや連携に当たる保育士の職種領域と役割についても学ぶ。専門領域となるが、講師の実務経験者としての実績を生かし具体的な事例やテーマを設定し学生に思考と討議を通して疑似体験の場を設け理解を深めていく一助とする。</p>	
社会的養護 II	<p>社会的養護における子どもの心情と置かれている現状を具体的な事例を提示しながら学び理解する。児童相談所と施設との関係を子どもと家庭とを結ぶ役割分担から理解する。施設養護の生活特性に目を向け、施設実習指導ともリンクさせていく。特に講師の施設現場職員の経験を活かす、少人数ゼミ演習の場を設ける。実際の子どもの関わり方や保護者との相談援助等の場面設定の事例演習をグループ討議し意見交換と幅広い知見を磨く機会とする。また、児童虐待の防止と家庭支援のあり方等を保育士の立場より理解し学び実践専門家としての自覚を促す機会とする。</p>	
子どもの保健	<p>子どもの身体的な発育や発達を理解し、子どもの心身の健康状態とその把握の方法についての知識・技術を身につける。そして、疾病の予防と健康増進のための保健活動の意義を理解し説明できるようになることを目標とする。</p> <p>健康の概念を学び、現在の保健活動や子どもの健康に関する諸問題を理解する。そして、子どもの身体的発育、運動機能及び生理機能の発達を理解した上で、健康状態の観察や不調の早期発見、子どもの疾病の特徴とその予防及び適切な対応について学ぶ。</p>	
子どもの健康と安全	<p>保育における保健的観点を踏まえた保育環境や援助について理解し、保育における衛生管理・事故防止及び安全対策・危機管理・災害対策について具体的に理解し行動がとれることを目指す。</p> <p>演習を通して、子どもが不調を訴えたときやけがをした時の適切な対応、感染症の発生時の対応、応急処置や救急時の心肺蘇生法の技術等を身につける。さらに、危機管理の意識を持ち、日常的な健康及び安全管理の実施体制とその組織の中での連携・協働、保健的対応として特別な配慮を要する子どもへの対応についても学ぶ。</p>	

専門 発展 科目	子どもの食と栄養	健康な生活の基本としての食生活の意義や栄養に関する基本的な知識を修得する。子どもの健康と食生活の重要性を理解し、子どもの発育・発達に即した食生活について講義や実習を通して学ぶ。養護および教育の一体性を踏まえた保育における食育の意義・目的、基本的考え方、食育計画、その内容等について理解し、子どもおよび保護者に対する適切な食育を学ぶ。家庭、児童福祉施設における食生活の現状と課題について理解し、体調不良時やアレルギー、障害を持つ子など、特別な配慮を要する子どもの食について理解する。	
	教育課程論	本授業の目標は、幼稚園・保育所・認定こども園の保育計画の意義について理解し、保育者として様々な年齢の保育の指導計画が立案できることをめざす。具体的な内容と計画は、カリキュラムの意義の理解、実践とカリキュラムの関係理解、0歳から5歳までの年齢別指導計画の作成と発表、幼小連携のカリキュラム理解、児童指導要録に記述、実践・計画・反省・改善のプロセス理解、園におけるカリキュラムマネジメントの理解、である。保育の実践力につなげるため、指導案作成、模擬保育、振り返りを入れ、主体的な学びになるよう授業工夫を行う。	
	教育方法・技術	(概要) 幼児期の学習の特性を踏まえた教育方法や教育技術の諸理論および実践方法を学ぶ。特に幼児期に重要視される生活体験を通じた学習に対する教育・保育・指導の諸理論や方法について学び、また、その教育効果の評価および振り返りを実践し学ぶ。また、子どもたちの興味や意欲を引き出すための情報機器を利用した教材作成、資料の提示方法を学ぶ。併せて幼児期の情報機器の活用実態やモラル教育の指導方法についても学びを深めることを目的とする。 (オムニバス方式／全15回) (4 豊田和子／8回) 幼児期の学びと子ども理解、幼児教育と保育方法の諸理論と技術、教育評価 (11 高瀬慎二／7回) 幼児教育への情報機器の活用と情報教育、保育教材・資料作成手段としての情報機器の利用	オムニバス方式
	幼児と健康	領域「健康」の指導につなげるため、幼児の心身の発達、基本的な生活習慣、安全な生活、運動発達などの専門的事項についての知識を身に付けることを目的とする。健康に関する現代的な課題を理解するため、最近の子どもたちの生活や体力などの資料をもとに考える機会を通し、身近な問題として捉えながら、課題解決に向けた方策を探る。子どもを取り巻く環境や遊具などを実際に活用しつつ、危険回避やリスク管理の大切さを体験的に探索することのできる機会を設ける。	
	幼児と人間関係	領域「人間関係」について、乳幼児時期の人間関係の発達を踏まえて、人との関わり方を育むために専門的な知識を身に付ける。幼児を取り巻く人間関係の現代的特徴とその社会背景を理解する。幼児期の遊びや生活の中で育つ人とかかわる力の発達について把握する。それぞれの発達の時期の特徴を具対的な事例をDVD視聴やエピソードを通して説明する。到達目標は、以下の3点である。 ①乳児期に育つ人とかかわる力の発達について理解する。 ②発達の姿と合わせて、自立心・協同性・道徳性について説明できる。 ③幼児を取り巻く人間関係をめぐる今日的課題を説明できる。	
	幼児と言葉	(概要) 保育における領域「言葉」の指導の基礎となる、幼児が豊かな言葉を身につけ、想像する楽しさを広げるための環境や児童文化財について学ぶ。人間にとって言葉とは何かを考え、言葉の意義や働きを理解するとともに、保育者としての言葉に対する感覚を養うために、絵本、紙芝居、児童文学などの児童文化財についての専門的な理解をもち、幼児の文字への興味と文字環境について学ぶ。 (オムニバス方式／全15回) (6 村田康常／8回) 人間にとっての言葉の意義や働き、幼児の言葉の発達、言葉の児童文化財(絵本、物語)について学ぶ。 (15 山本聡子／7回) 幼児の文字への興味と文字環境について学び、言葉遊びや紙芝居の理解を深める読解・製作・実践を行う。	オムニバス方式

<p>幼児と環境</p>	<p>「環境」の指導に関連する、幼児を取り巻く環境や、幼児と環境との関わりについての専門的事項における感性を養い、知識・技能を身に付ける。授業では、事例を映像などを視聴覚的教材として積極的に活用していく。自然物や身近な素材を用いた簡単な製作等、幼児が環境を取り入れて遊ぶ活動を実際に行い、体験的に学ぶ。</p> <p>以下の点を授業の具体的な目標とする。</p> <p>①幼児を取り巻く環境と、幼児の発達にとっての意義を理解する。 ②幼児期の思考・科学的概念の発達を理解する。 ③幼児期の標識文字等、情報・施設との関わりでの発達を理解する。 ④環境を通じた教育・保育の現在の課題について考える。</p>	
<p>幼児と表現</p>	<p>領域「表現」の指導に関するねらいを理解し、子どもの豊かな表現活動を支えるための知識・技術の修得を目指す。子どもの表現遊びにおける発達的な特徴を理解することを基礎とし、造形、音楽、身体など様々な表現活動の技法と展開方法を学ぶ。また、活動を通して子どもの表現遊びを支えるための感性を豊かにするとともに、他者の表現を受け止め共感する力を身につける。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (5 野田さとみ/5回) 子どもの身体表現における発達の特徴、身体やイメージを使った遊び、伝承遊びの技法や子どもの活動への展開方法について学ぶ。</p> <p>(10 内山尚美/5回) 子どもの音楽表現における発達の特徴、音やリズムを使った遊びの技法と子どもの活動への展開方法について学ぶ。</p> <p>(12 林韓燮/5回) 子どもの造形表現における発達の特徴、素材を生かした遊びの技法と子どもの活動への展開方法について学ぶ。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>保育内容指導演 総論</p>	<p>幼児期の子どもにとって、保育内容は何を育むのかという課題に直結している。特に、小学校の教科とは異なり、幼児期では保育内容の5領域は相互が重なりあり、関連しあい、同じ保育実践の中で複数の領域のねらいや内容が行われることは多々ある。</p> <p>本講義では、保育内容の全体構造について理解し、保育の基本である「環境を通して行う保育」「主体的な生活の展開」「発達の相互関連性の重視」などと保育内容がいかに関連しているかを学習することを目的とする。</p> <p>1) 幼児教育及び保育の基本的な考え方、2) 保育内容の考え方、3) 保育内容における幼児の活動に対する援助、4) 保育実践の読み取り、5) 現代における保育内容の抱える課題について学習する。</p>	
<p>保育内容指導演 健康</p>	<p>領域「健康」の全体構造、幼児が身につける内容、指導上の留意点、評価の考え方、小学校との連携を、実践の参観や観察、具体例を示した資料やICT教材をもとに理解する。また、幼児の心情、認識、思考、動き等を視野に入れた指導案を作成し、模擬保育とその振り返りを通して、保育におけるPlan(計画) Do(実行) Check(評価) Act(改善)サイクルの意義と機能を体得する。て、保育におけるPlan(計画) Do(実行) Check(評価) Act(改善)サイクルの意義と機能を体得する。到達目標は以下の通りである。</p> <p>領域「健康(健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う)」のねらい及び内容、育みたい資質能力について、その背景にある理論や現状の課題と関連させて理解を深め、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの実現の過程を踏まえた具体的な指導場面を想定して、指導方法及び保育を構想する方法を身に付ける。</p>	
<p>保育内容指導演 人間関係</p>	<p>幼稚園教育要領及び保育所保育指針に示された幼児教育の本質を踏まえ、領域「人間関係」におけるねらいについて明らかにし乳幼児の発達を理解する。また教材を活用した具体的場面を想定した保育を構築する方法を身に付けるグループワークも積極的に行う。更に様々な事例を通して個人、二者関係、集団関係など多様な人間関係の形態に触れ、自分の思いや考えを伝えるトレーニングを取り入れていく。到達目標は、以下の3点である。</p> <p>①領域「人間関係」のねらいと内容を理解する。 ②乳幼児期の人間関係の発達や学びの過程を理解し、具体的な援助について自分なりの考えを持つ。 ③保育現場における「人間関係」の指導、援助の在り方を体得する。</p>	

<p>保育内容指導法 言葉</p>	<p>(概要) 人間が人間として生きていく上で欠かせない「言葉」を、乳幼児がどのように獲得していくのか、その道筋と背景を理解し、保育の中でのねらいや、発達を取り巻く環境についても学んでいく。言葉の児童文化財を用いた指導案作成や模擬保育を実施し、その際には、ICTの活用も積極的に行う。また、絵本や素話などを体験し、保育者のことばかけを考えながら、保育場面において言葉がもっている多様な意味を実践的に理解する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (13 藤塚 岳子／7回) 幼児の言葉の発達、言葉の児童文化財(絵本、詩、素話)を用いた指導案作成について学び、絵本の読み聞かせ実践の模擬保育を通して領域「言葉」における児童文化財活用スキルを身につける。 (15 山本聡子／8回) 保育内容「言葉」のねらいと内容、言葉の保育教材づくりと言葉遊びの実践、模擬保育、保育者のことばかけについて学ぶ。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>保育内容指導法 環境</p>	<p>幼稚園教育において育みたい資質能力について理解し、幼稚園教育要領に示された領域「環境」のねらい及び内容についての理解を深める。幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて領域「環境」の具体的な指導場面を想定して保育構想する方法を身に付ける。指導案作成や、模擬保育を実施する際には、指導案の構造をしっかりと理解できるように、ICTの活用も積極的に行う。また幼児が経験し身に付ける内容が、小学校以降の生活や学習との関連性についても理解する。</p> <p>以下の点を、授業の具体的な目標とする。 ①「要領」「指針」「教育・保育要領」にある領域「環境」のねらい及び内容を理解する。 ②子どもの発達を踏まえた保育環境の在り方について理解する。 ③人的環境としての保育者の役割について理解する。</p>	
<p>保育内容指導法 表現</p>	<p>感性と表現の領域である「表現」の指導法について実践を通して学ぶことを目的とする。子どもの表現は生活や遊びの中から生まれるという特性を理解し、造形・音楽・身体など様々な表現遊びについて、子どもが意欲的に取り組むための指導方法に関する知識・技術を学ぶ。また、表現遊びの指導案作成及び模擬保育の実践に取り組み、実践の振り返りから、子どもの発達に即した学びの過程について理解する。</p> <p>(オムニバス形式／15回) (5 野田さとみ／5回) 子どもの身体表現遊びを指導するための知識・技術、表現遊びの指導案作成および模擬保育とその振り返りから学びの過程や他領域との関連について学ぶ。 (10 内山尚美／5回) 子どもの日常生活における表現、音楽活動における保育者の援助、音楽表現活動を指導するための知識・技術、表現遊びの計画・実践を学ぶ。 (12 林韓燮／5回) 「表現」のねらい・内容等を踏まえ、子どもの造形表現活動を指導するための知識・技術、及び情報機器の活用について学ぶ。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>多文化共生教育</p>	<p>1990年以降、急増した外国につながる子どもに対する国や自治体の受入れ施策や学校の取り組みを学び、子どもたちの現状や課題を把握する。就学年齢の子どもに加えて、就学前の子どもたちへの支援の重要性に気づき、実際の取り組み(ゲスト講師による活動報告も含む)を知り、今後に向けてのあり方を考える。</p> <p>以下の3点を到達目標とする。 ①就学前の子どもたちへの支援の重要性に気づく。 ②プレスクールや多文化子育てサロンの活動について、自分なりの工夫を考える。 ③多文化保育において、保育者として何をすべきかを考える。</p>	

	<p>多文化保育</p> <p>社会のグローバル化が進む中で「多文化共生」への取り組みが注目されている。保育や教育の現場においても多文化をめぐる多くの課題が存在する。そこで本講義では、日本国内外における多文化保育の事例(ゲスト講師による実践報告を含む)を検討しながら、その実態や課題および展望を考察する。</p> <p>以下の3点を到達目標とする。</p> <p>①日本における多文化保育の現状と課題を知る ②外国の保育を知り、視野を広げる ③保育者として多文化社会にどう向き合っていくかを考える</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (/12回)</p> <p>多文化保育とは 多文化保育の実践(ゲスト講師による実践報告を含む) 行政の取り組み 地域社会の取り組み 多文化保育の課題と展望 (④ 武小燕/3回)</p> <p>諸外国における保育の現状と課題</p>	オムニバス方式
	<p>キリスト教保育</p> <p>近代教育の確立の過程で、その根本がキリスト教と深くかかわってきたことを知るとともに、「キリスト教保育とは何か」について、レギーネ・シントラーの理念より学ぶ。到達目標は以下の3点である。</p> <p>①キリスト教保育を一般の保育の中にも生かすことができるようになる。 ②キリスト教保育の内容が、「いのち」と深くかかわっていることを知る。 ③クリスマスをはじめとするキリスト教の行事について理解する。</p>	
専門技能科目	<p>子どもの音楽基礎</p> <p>領域「表現」に関する専門的事項(幼児と表現)を支え、幼児の表現活動へと展開できるための、基礎的な音楽知識(理論)とピアノの技能を身に付けることを目標とする。1年次終了時には、バイエルやブルグミュラーなどを中心とした平易なピアノ曲、子どもの歌の弾き歌い、子どもの歌の簡易な伴奏付けができるようにする。ピアノは各々のレベルに合わせたグレード制を併用し、子どもの豊かな音楽表現を支えるための技術定着を目指す。理論は領域「表現」での応用に配慮した形で展開し、ピアノの授業は個人レッスンの形態で行う。</p>	共同
	<p>子どもの造形基礎</p> <p>この授業では、保育者に必要とされる造形技能や表現力を修得し、子どもの造形遊びについて学ぶことを目的とする。そのため、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を視野に入れながら、表現素材と道具について理解し、その扱い方を身につける。また、実践活動としては保育現場で行われている造形遊びを幅広く取り入れ、平面造形、立体造形、応用表現の三つの視点から基礎演習に取り組む。なお、基礎演習の過程を、ICTを生かして記録し、振り返ることで造形基礎力を高める。</p>	
	<p>子どもの音楽表現 I</p> <p>子どもの成長発達における表現遊びの意義を理解し、領域「表現」の内容に則した表現遊びの内容を考えることができるようにすることを目標とする。特に音楽の基礎的な知識を修得し、声楽や鍵盤楽器などの演奏技術を学ぶことを通し、子どもの表現活動を支えるための感性を豊かにし、表現することの楽しさとその要因について分析できるようにする。そして乳幼児の表現の発達の流れを理解すると共に、子どもの表現は生活や遊びを背景として育まれるなどの特質について様々な表現活動の実践を通して学ぶ。</p>	共同
	<p>子どもの音楽表現 II</p> <p>子どもの表現遊びにおける保育者の役割を理解し、子どもの表現遊びの特質をとらえた指導法を修得することを目標とする。特に音楽の基礎的な知識や声楽、鍵盤楽器などの演奏技術を生かし協働して表現することによって、他者の表現を受け止め共感し、表現を深化させられるようにする。さらに子どもの表現活動を支え、のびのびと展開させられるようにする。そして子どもの表現遊びの発達的特徴や発達に応じた援助に対する理解を深め、表現遊びを援助するための人的環境・物的環境などの役割や意義について、実践を通して学ぶ。</p>	共同
	<p>子どもの造形表現</p> <p>この授業では、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境構成など専門的知識、技能、表現力を深めていくことをねらいとする。そのため、造形表現に関する基礎的知識・技能を修得し、表現遊びの指導における課題解決力を身につける。また、領域「表現」の指導の観点から、表現遊びや環境構成などの幼児の表現に関する実践事例を分析・検討する。なお、実践力を身につけるため、作品(教材)製作をはじめ、グループワークの実施や実践場面の振り返りを行う。さらに、情報機器を活用して学習過程を可視化し、学習ポートフォリオを作成・発表する。</p>	

子どもの身体表現	<p>本授業では、身体を使った表現活動の実践を通して、表現の基本となる自分の感覚を研ぎ澄ますこと、他者に伝えること、他者の表現を受け止めること理解するとともに、保育者として基本的な身体表現能力を身に着けることを目指す。また、総合的な表現活動の計画及び実践を通して、仲間とイメージを共有し創作する力を養う。到達目標としては以下の4点である。</p> <p>①表現の原点である「感じること」「伝えること」について、実践を通して理解する。</p> <p>②表現活動を通しての他者の表現を受け止める力を養う。</p> <p>③保育者としての基本的な身体表現能力を身に着ける。</p> <p>④総合的な表現活動の取り組みを通して、他者とイメージを伝えあい、表現方法を工夫し創作する力を身に着ける。</p>	
保育技術演習	<p>保育に必要な基礎的な手遊びや歌、絵本や紙芝居の読み聞かせ方などの技術を個及びグループのロールプレイングを通して身に付ける。また、エプロンシアターやパネルシアターなど保育教材の魅力に触れ、保育者として求められる子どもへの関わり方や声の掛け方を自ら考えようとする力を修得する。その過程において、人前に出ることや声を出すことに慣れ、自分の課題を把握しながら、保育技術に必要な実践力や応用力の定着化をねらう。</p>	
障がい児者援助技術	<p>本授業は障害児や障害者を支援する技術を学ぶことを通して、対象者に寄り添い、その思いを汲み取り、その思いに応えるため援助について学ぶことを目的とする。障がい児や障がい者の援助を行うためには、人間の発達段階と関連づけて理解する必要がある。保育士の職務を広く捉え、対象児者が基本的な生活習慣など自立した生活力を身につけるための支援、コミュニケーション技術など、対象児者の障がいや状況などに合わせた具体的な援助の技術・技法について実践を通して学ぶ。</p>	
保育実習 I (保育所)	<p>保育実習 I (保育所)は、保育所における2週間の体験的な学習を通して、それまでの学内外の学修で得た知識や理論が保育現場でどのように展開されているかを学ぶことを目的とする。具体的には以下の点を目指とする。</p> <p>①保育所の基本的な役割や機能を理解し、観察や子どもとのかかわりを通して子どもへの理解を深める。</p> <p>②保育士の業務内容と職業倫理を理解し、積極的かつ向上心をもって課題に取り組むことができる。</p> <p>③実習を通じて保育者としての自分自身を分析し、自己の以後の学習課題を明確にすることができる。</p>	共同
保育実習指導 I (保育所)	<p>本授業は、保育実習 I に必要な知識や心構え、技能などを習得するための「事前指導」と、実習後に実践し学んだことを振り返り今後の課題を明確化する「事後指導」によって構成される。授業における目標は以下の通りである。</p> <p>①実習の意義・目的、実習の内容を理解し、自らの実習課題を明確にする。</p> <p>②保育所保育における子どもの最善の利益の考慮と、守秘義務等について理解する。</p> <p>③実習の計画・実践・記録・評価の方法や内容について具体的に理解する。</p> <p>④事後指導を通して、実習の振り返りと自己評価を行い、次の実習に向けての課題を明確化する。</p>	共同
保育実習 I (施設)	<p>児童福祉施設等の役割や機能について、実践を通して理解を深め、保育士としての自己の課題を明確化することを目的としている。児童福祉施設等における支援の実際を学び、保育士の多様な業務内容や職業倫理について、具体的な実践に結び付けて理解するとともに、家庭と地域の生活実態に触れて、児童家庭福祉および社会的用語に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を養う。</p>	共同
保育実習指導 I (施設)	<p>保育実習 I (施設)における児童福祉施設等および障害者入所施設等での実習の経験や、既習の教科の内容およびその関連性を踏まえ、観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学び、施設における保育士としての実践力を養うとともに、保育実習(施設)の意義と目的を理解し、子どもの最善の利益を考慮した関わりの具体的な理解などを総合的に学び、保育士の専門性と職業倫理について理解する。また、実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、施設における保育士の姿勢についての課題や認識を明確にする。</p>	共同

専門実習科目	保育実習Ⅱ	<p>保育実習Ⅱは、保育者として実践する前の最終段階の実習として、これまでに修得した知識や技術を基礎とし、これらを保育の場で総合的に関連づけ、応用する力を養うことを目的とする。具体的には以下の点を目指とする。</p> <p>①保育所の機能や役割について、具体的な実践を通して理解を深める。 ②子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して、保育の理解を深める。 ③既修の教科目や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び子育て支援について総合的に理解する。 ④保育の計画・実践・観察・記録及び自己評価等について、実際に取り組み、理解を深める。 ⑤保育士の業務内容や職業倫理について、具体的な実践に結びつけて理解する。 ⑥向上心を持って実習に取り組み、自らの課題を明確化する。</p>	共同
	保育実習指導Ⅱ	<p>本授業は、保育実習Ⅱに必要な知識や心構え、技能などを修得するための「事前指導」と、実習後に実践し学んだことを振り返り今後の課題を明確化する「事後指導」によって構成される。これまでの実習の集大成としての保育実習Ⅱに臨むにあたって、実習に必要なことを具体的に準備する中で保育の実践力が養われるよう、以下の点を目指とする。</p> <p>①実習の意義や目的、方法など実習全体に関わる基礎的な事項、実習園の特徴や保育目標について理解する。 ②実習記録や指導計画や保育実践について事例を通して理解する。 ③保育実習Ⅰの反省を踏まえたⅡにおける自己課題を明確化し実習に臨む。 ④保育士の専門性と職業倫理について理解する。 ⑤事後指導を通して、実習の振り返りと自己評価を行い、今後の保育に対する課題や認識を明確にする。</p>	共同
	教育実習Ⅰ	<p>教育実習Ⅰは、学内で学んだ領域や、専門的な知識や技術などを、幼稚園での実践を通して磨く機会である。幼稚園で子どもと生活することを通して、子ども観、保育観を高めることを目的とする。</p> <p>具体的な目標は以下のこととする。</p> <p>①幼稚園の保育目標、方法を理解し、子どもを捉える眼差しを養う。 ②園の環境、設備、子どもの遊び、保育の流れ、教師の動きなどを観察する。 ③実際に保育に参加する。</p>	共同
	教育実習指導Ⅰ	<p>教育実習の目的や方法、実習における心構えや注意事項など、実習全体に関わる基礎的な事項を理解する。</p> <p>具体的には、以下のことを行う。</p> <p>①教育実習Ⅰで必要な実習の目的や実習に実習を行う幼稚園の概要や機能を理解する。 ②子どもの発達、教師と子どもとの関わり、教師の職務や役割など、幼稚園教育の基本を把握することを目的とする。 ③実習終了後は、振り返りを行い、保育実習Ⅲに向けた自らの課題を見いだす。</p>	共同
	教育実習Ⅱ	<p>教育実習Ⅱは、教育実習Ⅰで学んだことを基礎とし、参加・指導・援助を中心に構成されている。保育の準備、環境の構成、子どもの主体的活動・課外活動・園行事への参加を通して実習を行う。特に、教育実習Ⅱでは、実習生自身が指導教諭のもと、幼稚園教育要領及び子どもの実態を踏まえた適切な指導案を作成し日案を作成し、保育を行う。</p> <p>具体的な目標は以下のこととする。</p> <p>①これまで学習してきたことを実践の場に適応しながら、自身の中に具体化し、さらに新しい学習課題を見出す。 ②子どもとの触れ合いを通して、子どもへの理解を深める。 ③保育者の役割と職務内容を理解し、専門職としての使命感を体感する。 ④望ましい人間関係のあり方を学ぶ。 ⑤大きく変化する社会の中に幼稚園の実態について学ぶ。</p>	共同
	教育実習指導Ⅱ	<p>教育実習Ⅰでの課題をもとに、大学で学んだ領域や教職に関する専門的な知識・理論・技術等が、教育実習での実践につながるような指導を行う。</p> <p>具体的には、以下のことを行う。</p> <p>①幼稚園の機能や幼稚園教諭の役割についてより実践的に理解する。 ②幼稚園と家庭や地域社会との連携を視野に入れ、地域の幼児教育センターとしての幼稚園の役割について理解を深める。 ③実習終了後は、振り返りを行う、幼稚園教諭になるための自らの課題を見いだす。</p>	共同

専門演習・研究科目	子ども学フィールドワークⅠ	<p>本授業は、反省的思考の習慣を身につけるための第1ステージとして、子どもに出会い子どもの側に身を置くことを目的とし、幼稚園での観察と振り返りを中心に学習する。保育現場に出るための前段階として、①保育者への目的意識・意欲、②学生・社会人としてのマナー、③文章力、図表の読み方・書き方等の基礎学力に關した学習を初年次教育として実施する。その後、4グループに分かれて観察の視点(①環境、②子どもの生活、③子どもの発達、④子どもの運動、⑤子どもの人とのかかわり)について学び、5回の幼稚園での観察を実施し、各自の振り返りの発表と討議から子どもの側に身を置き、子どもを理解することを学ぶ。</p> <p>以下の5点を到達目標とする。</p> <p>①敬語の使い方、レポートの書き方、図表の読み方・書き方を身に付ける。</p> <p>②幼稚園の物的環境と保育における環境の意義を理解する。</p> <p>③幼稚園で子どもを観察し、子どもの生活、子どもの発達、子どもの運動、子どもの人とのかかわり等について理解する。</p> <p>④発表、討議を通して、子どもの側に身を置いた子ども理解を深める。</p> <p>⑤発表、討議を通して、仲間とのコミュニケーション力をつける。</p>	共同
	子ども学フィールドワークⅡ	<p>本授業は、反省的思考の習慣を身につけるための第2ステージとして、子どもの行為と表現のかかわりを理解することを目的とし、保育所で子どもと交わる実践とその振り返りを中心に学習する。前期は事前学習を全体指導として実施したのち、保育所において子どもと交わる実践に取り組み、実践を記録することや記録をもとに子どもの行為と表現のかかわりについて考察する。後期は、4グループに分かれ、4つのテーマ(身体的な表現、造形的な表現、音楽的な表現、言語的な表現)に關して保育実践の事例学習を行う。そのうえで、前期に行った子どもと交わる実践を4つのテーマに合わせて分析し、グループに分かれまとめた内容を発表することにより、子どもの行為と表現のかかわりを理解する。</p> <p>以下の4点を到達目標として学修する。</p> <p>①子どもと交わることにより、子どもの行為や表現を記録する。</p> <p>②保育実践の事例から、子どもの行為と表現のかかわりを理解する。</p> <p>③保育実践に關わるテーマ(身体的な表現、造形的な表現、音楽的な表現、言語的な表現)を選択し、調べ学習により子ども理解を深める。</p> <p>④自分たちのテーマ学習についてプレゼンテーションする力、仲間の発表を聞く力をつける。</p>	共同
	子ども学フィールドワークⅢ	<p>本授業は、反省的思考の習慣を身につけるための第3ステージとして、保育実践のプロセスを理解することを目的とし、本学キッズルームでの子育て支援の場での保育実践を行う。実践を行う前に、キッズルームを見学し子育て支援の環境を理解する。次に、実際に子どもとふれあい、保護者とのコミュニケーションを取り、かけがえない命を守ることの重要性を体験的に学び、子育て支援の意義を理解する。その後、グループで実践を計画・準備し、練習を行い、実践し、省察し、課題を発見し、次の実践において改善を試みるというプロセスを通して、反省的思考の意義を体得する。</p> <p>以下の4点が、到達目標となる。</p> <p>①子育て支援の意義に關して、体験的に理解する。</p> <p>②乳幼児とふれあう力、保護者とのコミュニケーション力をつける。</p> <p>③保育実践における、計画、実践、省察、次の実践という循環を理解する。</p> <p>④仲間との対話により、保育実践における反省的思考の意義を理解する。</p>	共同
	子ども学研究ゼミナール	<p>本授業は、反省的思考の習慣を身につけるための総仕上げのステージとして、探求のプロセスを理解することを目的とし、これまでの学びをベースに各自の関心に基つき、「幼児教育・保育」を探求する。仲間との議論や専任教員の指導により、各自の幼児教育・保育に關する問題意識を明確にする。そして、文献や資料を読み、問題意識を「幼児教育・保育にかかわる研究テーマ」として設定する。研究を進めるにあたっては、教員の指導を受け、仲間との議論を繰り返す、研究テーマ、研究目的、研究方法を明確にし、実践研究や文献研究を進め、解決された課題と残された課題を明確にする。各段階で、保育実践の場に出かけ、確認作業をしながら進める。</p> <p>以下の5点が、到達目標となる。</p> <p>①これまでの学修に基つき、問題意識を明確にする。</p> <p>②文献や資料を読み、問題意識を「幼児教育・保育にかかわる研究テーマ」として設定する。</p> <p>③保育実践の場に出かけ確認作業をしながら、研究方法を見だし、実践研究や文献研究を遂行する。</p> <p>④仲間の研究を理解し自分の研究を深める。</p> <p>⑤探求のプロセス(課題発見、テーマの設定、実践・理論検証、問題解決)を身に付ける。</p>	共同

	卒業研究	<p>子ども学研究ゼミナールにおいて、仲間との議論と専任教員の指導により、自らが取り組む研究テーマで、各自、実践研究や文献研究を進め、「幼児教育・保育」という営みを探求する。その成果を、専任教員の専門的な指導により卒業論文としてまとめることが、本科目の課題である。各自の研究に関する課題意識を明確にし、問題を設定し、解明し、説得力のある文章にまとめることを通して、保育実践の場に身を置いた場合に、問題状況を読みとり、問題設定をし、保育を創造することの喜びと動機付けを獲得する。</p> <p>以下の4点が到達目標となる。</p> <p>① 文献や資料を読み、幼児教育・保育に関わる課題や問題意識を記述する力を養う。</p> <p>② 幼児教育・保育の実態を把握し、問題解決に向け具体的な提案を実証的に検討し論述できる力を養う。</p> <p>③ 学修の総まとめとして、論文を計画、立案、作成することで、幼児教育・保育を研究する力を身につける。</p> <p>④ 自ら目指す保育者像を描き出し、生涯にわたって主体的に学び続ける意欲を養う。</p>	共同
	卒業研究	<p>子ども学研究ゼミナールの担当教員による指導を受ける。</p> <p>(1 鬘櫛久美子) 子ども学に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(2 荻原はるみ) 特別支援を必要とする子どもの保育に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(3 小野隆) 子どもの健康、スポーツ・レクリエーションに係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(4 豊田和子) 保育者の役割、保育の方法と内容に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(5 野田さとみ) 子どもの身体表現・運動遊びに係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(6 村田康常) 子どもの言葉に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(7 鈴木裕子) 子どもの健康に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>() 多文化共生に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(8 青山佳代) 保育の内容と方法に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(9 片山伸子) 子どもの発達に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(10 内山尚美) 子どもの音楽表現に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(11 高瀬慎二) 心理学と調査・統計に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(12 林韓燮) 子どもの造形活動に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(13 藤塚岳子) 子どもの人間関係に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(② 菊地 篤子) 乳児保育に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(14 勝間田明子) 子育て支援に係る課題の研究指導を行う。</p> <p>(15 山本聡子) 子どもの言語表現と保育実践に係る課題の研究指導を行う。</p>	共同
	保育・教職実践演習(幼)	<p>(概要) 授業では、現代日本社会における保育・教育上のさまざまな問題を取り上げ、使命感や責任感・教育的愛情の自覚、社会性や対人関係の能力、幼児理解や学級経営等に関する能力、保育内容の指導力等の保育者に必要な資質を、学生自らが高めていくことを目指しながら、討論などを通して課題を深めていく。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 鬘櫛久美子／3回) 保育者の社会性や対人関係能力という視点から課題を深めていく。</p> <p>(4 豊田和子／3回) 保育者の子ども理解や学級経営という視点から課題を深めていく。</p> <p>(5 野田さとみ／3回) 履修カルテを参照し、保育者の使命感や責任感という視点から課題を深めていく。</p> <p>(8 青山佳代／6回) 保育内容等の指導、子育て家庭に対する支援という視点から課題を深めていく。</p>	オムニバス方式

学校法人柳城学院 設置認可等に関わる組織移行表

令和元年度(2019年度)

入学 編入学 収容
定員 定員 定員

名古屋柳城短期大学			
保 育 科	200	-	400
専攻科保育専攻	15	-	30
計	215	-	430

令和2年度(2020年度)

入学 編入学 収容 変更の事由
定員 定員 定員

名古屋柳城女子大学				大学新設
こども学部	こども学科	70	-	280
計		70	-	280
名古屋柳城短期大学				
保 育 科		130	-	260
専攻科保育専攻		15	-	30
計		145	-	290

定員変更
(△70)